
太安万侶《おおのやすまろ》古事記を作った人の秘密 酔いどれ詩人、別荘病院の調査

春野一人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おのやすまろ
太安万侶古事記を作った人の秘密 酔いどれ詩人、別荘病院の調査

【Nコード】

N5099Y

【作者名】

春野一人

【あらすじ】

古事記と日本書紀といった二つの歴史書が、同時に作成された。両書ともかなり似通った内容であるが、大きな違いもある。日本書紀に関しては、その後の官制歴史書である「続日本紀」に作成された記事が載せられているが、「古事記」については記載皆無である。「古事記」は巻頭に、太安万侶が、編者として、長々と文章を書いているので、それを本として、「

古事記」の作成が、日本書紀に十年ほど先立つことが知れるのみである。著名な酔いどれ詩人・田沼遠は入院ごとの歴史研究を出版し、

ちょっと人気を得ている。さて、今回のテーマは何か？

酔いどれ詩人、田沼遼へたぬまりようの入院

酔いどれ詩人、田沼 遼は、数年に一度体調を崩し、別荘行きと称して憩意な院長のいる、鎌倉海浜クリニックに入院するのが常なのだ。遼は詩のみでなく、洒脱な味わいのエッセイも書き、人気がある。読書好きの彼にしても病室では、いささか退屈である。このころは、退屈ををまぎらわすのに彼は歴史の謎に取り組むことになっている。前回は邪馬台国のあった場所、前々回は織田信長の本能寺の変をテーマに取り上げて、「酔いどれ詩人・海浜リゾート病院研究所 その二・邪馬台国はどこにあったか？」と「酔いどれ詩人・海浜リゾート病院研究所 その一・織田信長はなぜやすやすと本能寺で殺されてしまったか？」ずつと以前には「酔いどれ詩人・海浜別荘病院研究所・日本は何故不利な戦争に突入してしまったか？」など、シリーズとして出版されている。

さて今回は、どうしようと田沼 遼は特別室の病室から見える、鎌倉材木座の青い海を眺め眺めていた。「酔いどれ詩人」などという通称は、実は彼自身が名乗っているのです。田沼は実はかなりきまじめな人で、キリスト教系清滝女子大学で講師の職も担っているのです。講義はもちろん、日本文学である。

軽くドアがノックされた。どうぞという田沼の声で入ってきたのは、文華爛漫社の女子編集社員、田村先生担当の三十台始め独身の山辺沙也香やまのへさやかであった。甘いものが好きで日本酒も好きな彼女は、中背でやや肉がついた体型である。しかしながら和服を着せたら似合うだろうと思わせる、なかなかの目鼻立ちがととのった美人である。「先生、また入院だそうですね。先生、お口寂しいかと思ひまして、ノンアルコールビールダーズ持ってきましたよ」

「おいおい、その先生は辞めてくれよ。しかし、そのノンアルコー
ルはいいね」

「でしょ？ 気に入っていただけでよかったです。・・・ところで、

センセ、今回はテーマは、決めておられます？」

「あのね、僕は何も、作品を書くために入院するのではないの。あくまでも僕の暇つぶしの結果を、君が録音から起こしてくれただけだからね。今回もそうとはいきませんよ」

「まあ！センセ意地悪じゃないですか」

「あは、そうかな。実は海浜リゾート病院シリーズはなかなか好評で、良い飲み代しろになっていてるんで、なにかないかなと考えてはいるんだ、なにか良いテーマはない？」

「そうですね、前作の邪馬台国はどこにあつたかは、詩人らしい万葉集の知識もあつてユニークで、かなり評価が高かつたですね。・出版の立場から見ると、邪馬台国論争はどうやら一段落したように思えますので、古代でも何か違うテーマがないですか」

ドアがノックされ、看護婦長の草野英子がコーヒーを二つトレイに載せて入ってきた。

「山辺さん、お久しぶりです。二年前田沼先生が入院されていた時いらいですね。先生しばらくの入院になりそうなので、又なにかとよろしくお願いいたします。なんだか、先生が体調を崩されたのが嬉しいみたいで恐縮ですが、先生はこの病院の事をエッセイで別荘と呼んでおられますから、病院全体が華やいだ気持になつていてるんですよ。・あ、コーヒーを入れました、お好きでしたよね。・先生はコーヒーと日本酒とウイスキーにはうるさい人なんですけど、今はいくらなんでもお酒は当分だめなんで、特別に良い豆が手に入りましたので飲んでいただこうと、入れてきました」

詩人、テーマを決める

「あ、これはうまいね」一口すすって、ベッドに腰掛けている田沼は立っている婦長を見上げて言った。

「私ね、これと言った取り柄はないんですけど、コーヒーだけはこっているんですよ。気にいっていただいてうれしいです」

「お世辞じゃないよ。ホントにうまい。なにか秘訣があるのかな」
「良い水を使いますの。私、丹沢の山に近い厚木に住んでいるので、山からのわき水が手に入るんです。その水で普通にドリップで入れますと、安い豆でも見違えるようなコーヒーが作れるんです。でも、今日は豆も一番高いの使ってみました」

「イスラム教では酒を飲んではいけないんだよ。それでアラブの坊さんは、酒代わりにコーヒー・コーヒーなんだ。僕もしばらくはコーヒーが酒がわりだな」

「コーヒーならいつでもお申し付けください。すぐ用意しますからね。．．．ところで先生は、女子大で日本文学を教えているということですけど、日本書紀とか古事記なども教えておられるのですか」「5年まえからね、その大学教授が古くからの飲み友達でね、やってみないかと声をかけられたんだよ。日本書紀とか古事記は、ちよつと自分には縁遠かつたんだがね、講師就任を機会に少し読み込んだよ」

「あら、そうなんですか。私、歴史が好きで閑だと「平家物語」とか、小説の「平将門」などを読む人なんです。．．．今、ひとつ疑問が私にはあるんです。それで先生に聞いてみようかなと思ったわけなんです。いいかしら?」

「解ることなら答えますよ」

「日本書紀と古事記は似ているでしょ。聞くところによると同じ頃に作られたと言つことらしいのですが、同じようなものが、どうして二種類もあるのか私には解らないんです」

「そうだね。それは気がつかなかったな。それは変だね。不勉強で、その質問には答えられないな、ちよつと調べてみるよ」

横で聞いていた山辺沙也香の、眼が輝いた。そして言った。

「田沼先生、それいいですね。日本書紀と古事記には数々な謎があるんですね。その成立とか内容とか。どうです今度は「日本書紀の秘密」などというのは、いけるかも」

「ふむ、そうだね、日本書紀すら偽書ではないか、という人がいるからね。やってみようか。以前に書いた「邪馬台国はどこにあったか」でも日本書紀の記事を、しばしば検証したが『不思議な本だな』と、思ったことがあるからね。山辺さん、取りあえず古事記と日本書紀の原書と注釈本と現代語訳、それからパソコンを一台用意してくれるかな。あとは君の手伝いとパソコンで必要な本はおいおい手に入れることにしよう」

古事記の序文

古事記、日本書紀が届けられて一週間後、昼過ぎ沙也香は田沼の病室にやって来て言った。

「先生、なにか収穫ありましたか？」

「そうだね、その前に、僕が我流で訳した古事記序文を読んでみてくれるかな」

沙也香は、さしだされた原稿用紙に書かれた古事記序文に眼を通した。

古事記 序

臣の安麻呂は申し上げます。大昔、この世の根源が固まり始めても、いまだに定かな兆候を取ることがありませんでした。したがって名もなく動きもありません。だれにもその形を判断できない状態でありましたが、やがて天と地がはじめて分かたれて、神々の誕生となりました。神の陰陽も天地のように分かたれて二靈（イザナギの命・イザナミの命）は万物の祖先となりました。両神は陰の世界である幽界と陽の世界である現実との両方の世界を行き来して、太陽の神と月の神が眼を洗うにつけて現れ、海水に浮き沈みして身をあらうごとに多くの神々が現れました。この世の始めは暗くてはつきりしませんでしたが、神々の自らある智恵により国を生み、島を生み、再び神を生み、人を生んだことが解ります。天の岩屋戸に鏡を掛けた時から百の天皇が続き、剣でおろちを切って萬神が誕生したのであります。神々が安川原やすのかわらで合議をなされ、それゆえ天下は穏やかになり、出雲の浜で大国主の神に談判してからは、国はいよいよ平穏となりました。この時をもって二ニギの命が初めて高千穂に下り、神武天皇が秋津島を巡歴なされました。荒々しい神が熊に化けて現れるに及んで天から剣を得、尾のある人々が道に溢れて遮り

ましたが、大カラスが吉野への道を導きました。軍の者は舞い踊りながら敵を打ち合図の歌で賊を討ち取りました。崇神天皇は夢の中のお告げを聞いてオオモノ又シ神を祭られ、それ故に賢明な天皇と呼ばれました。仁徳天皇は民家の煙の立ち上るのを眺めて、心安らかになられましたから、今でも、聖帝と呼ばれております。成務天皇は国や県の境を定められ允恭天皇は遠飛鳥に飛鳥の都を建てて、天下の氏や姓を正されました。このように天皇それぞれの方が行ったことは様々でありましたが、道を正すと言うことにおいて他ならないことでありました。

飛鳥清原に大宮殿を建造なさつて、全国をお治めになりました天武天皇の御世の前頃になりますとやがて天武天皇になれる皇子は天子たる徳を持ちながらも、いわれがあつてお隠れになっていましたが、ついに雷鳴を轟かせる時がやつて参りました。

古事記序文 二

けれども、天命がまだ至らないので、蟬の抜け殻のように吉野の山に棲息なさりましたが、やがて時を得て伊勢の国に虎のように進まれ、その軍は瞬く間に山川を越え渡り、軍勢はあたかも鳴りやまぬ雷鳴のごとく雄壮でありました。猛士は煙のよう燃え立ち、赤旗は、兵を引き立て、凶徒は屋根の瓦のように崩れ落ちました。そして短時日のうちに敵軍は壊滅し、戦場の悪臭も妖気も、自然と消え澄み渡りました。それで戦役に用いた牛を放ち、馬を休め、心安らかに都に帰り、戦旗を巻き、戈（なぎなたの様な長刀）を納め、天下泰平の歌を歌い都に入られました。時は正に太歳星（木星）が酉の方角にある年の二月、清原の大宮殿にて即位なされました。その道は中国賢帝五帝の一人黄帝にまさり、徳は周王を越えておりました。天皇はしるしとして三種の神器を受けて、その威光は国の隅々まで行き渡りました。しかも天皇は海のように深い智慧をもって、遙かな古代の事を探り求められ、明晰な御心は先代の天皇の業績を見据えておられます。

ここに天皇が言われました。

「朕が聞くことには、『諸家が先祖から伝え持っている帝紀（天皇の系図）と本辞（出来事）は、すでに真実と違って多くの虚偽を加えている』ということである。それであるから、今の時を以て、その誤りを正さなければ、何年も経ぬうちに、その真実が失われるであろう。史実の真実を定めることは、国家行政の根本である。それ故、国史を定め、後の世に伝えようと思う」

時に、一人の舎人（官吏）がいました。姓は稗田、名は阿禮、年は二十八でした。人格は聡明で、書を読めば暗唱し、耳にはいる言葉は、すべて記憶しました。それで、阿禮に勅語して（命じて）天皇の系譜、出来事の数々を読み習わせました。しかしながら、諸々の事情が変遷し、いまだに史書をなすに至りませんでした。

臣がつつしんで思う事には、当代の元明げんめい天皇は天地人の三つの徳に通じておられ、その威光は宇宙の隅々まで行き渡り、御殿におられたままで、その徳は馬のひずめの先、舟の舳先まで及んでおりま
す。太陽は天に燦々と輝き、慶雲は空を彩り、二本の幹が一本に合
体し、一つの茎から多数の穂がでるといふ、吉兆が次々に現れて、
これを書き留める書記官の手を休める閑すらもないありさまでござ
います。又、異国からの貢ぎ物はうず高くたまり、倉の中が空にな
ると言ふ月は一月もありません。

古事記序文 三

ここに、天皇は旧辞の誤っているのを惜しみ、和銅四年（註・西暦711年）九月十八日をもちて、臣安万侶に詔して、先の天皇が命じて稗田阿禮に音読させた旧辞を選録して献上せよとのことでありますから臣はお言葉のままに子細に採録いたしました。しかしながら上古の時は言葉は質朴でありまして文章化することはきわめて困難でありました。漢字の意を持ちて表記すれば、阿禮の表現するところと異なり、かといって、阿禮の発する音のみを連ねては、はなはだ意が通りません。

それでありますから、一句の中に、音と訓をまじえて用い、単語などはまったく漢字の訓を用いて表記したものもあります。その上で意味の取れない言葉は、注を用いて明らかにし、意味のとれるものは、ことさらに注をつけませんでした。姓の読み方については、日下という字を玖沙下と読み、帯の字を多羅斯と読みますが、このようなたぐいは、解ることありますから、特に注をつけませんでした。古事記の内容は天地開闢より始め推古天皇の御世にて終わります。それ故、神代から神武天皇までの神々の代を上巻とし、神武天皇より応神天皇までを中巻とし、仁徳天皇より推古天皇までを下巻とし、あわせて三巻を採録して、慎んで献上いたします。臣安万侶、かしこみかしこみ、深々とひたすら頭をさげます。

八日 正五位上勳五等太朝臣安万侶

和銅五年正月二十

「どうかな、必ずしも原文とおりでないが、僕もへボ詩人ながらいやしくも詩人であるからには、雰囲気は伝えているつもりなんだがな」と、田沼は、沙也香が読み終わったようなので声をかけた。

「これならよく分かりますね。普通は現代語訳でも、よくわかりま

せんものね」

「古代の書物にしては珍しく、作者があつかましく出てきて、古事記の成立についてこと細かく説明しているね。天皇・皇子をさしおいて、正五位という、やつと宮殿に上がることができるというぐらいたいていして位が上でない者が、このように官制の書物の巻頭に文を記載する事じたいが異常な事と思われるんだよ。ちなみに日本書紀編纂の責任者は皇子で第一位という高位の舍人親王とねりなんだ。その舍人親王ですら、日本書紀に序文など書いていないのにおかしいのではないだろうか。まあ、日本書紀には序文とか後書きとかは一切ないのだがね……。これは今で言えば、大会社の社史に平社員が序章を書いているような違和感を感じるんだがどうだろう」

「そういえば、そうですね」

病室の窓辺に秋の材木座の海が陽をうけて、きらきら輝いているのが見えている。二人は無口になって、その景色に見入った。

「いつ見ても、良い眺めですね」

「どうだ、そこまでちよつと出てみないか」

「あら、いいんですか」

「なに、大丈夫さ。僕の入院は単なる肝臓君の骨休めだからね」

「ま、都合のいい入院です事」

「君ね、詩人を舐めてはいかんよ。普通、詩人は無法者で悪人なんだよ」

その時、ドアがノックされて、入って来たのは海浜病院の院長、大島五郎であった。

「田沼先生ご挨拶おくれました。ちよつと糖尿病の研究会があったもので、三日ばかり留守にしてみました」

「いや、いいですよ。ひどく体調が悪いわけではないんです。これは内緒ですが、ちよつと詩人仲間との酒のつきあいなどが煩わしくてね。それから逃げるために入院を院長にお願いしようと電話したら、おられなかったのです。そしたら婦長さんがね快く受け取れたんですよ」

「あはは、婦長は、裏で女院長などとよばれてるようですからね、私としては従っている方が楽なのですよ。それで良いのです。．．．ところで、今度のテーマはもうおきまりなんですか？」

「ええ、古事記と日本書紀の関係がなんだか非常に怪しいのです。太安万侶がどのように関わっているかもなんだかはつきりしません。これをすつきりとさせたいのですが、どうなりますか。どうせ暇つぶしの座興ですから良いのですが．．．」

「また、これを元に出版なされるんでしょう？本に登場するということでは近頃はこの病院の特別室はだいぶ人気が出てまいりました。また、普通の患者さんも面白がっているようなんですよ」

「おや、良い話しを聞いたぞ。今回は病院から宣伝係として給料が
でそうだな」

「いや、それはかんべんしてください」

院長が自室に引き揚げたあと、田沼と沙也香は浜辺の散歩に出か
けた。

十月の日没は早い。西に海を見る材木座海岸は鎌倉のはずれで、人
影が少なかった。夕陽が雲と海を赤く染めている。田沼と沙也香は
近くの、海辺のレストランに入り込んでコーヒーを注文した。

「たまには、こうして散歩でもして気晴ししないとね、良い発想も
生まれてこないよ」

「この時間とても良いですね。先生がここが好きなのがわかります
わ」

「そうだろう。僕は海が好きでね。君も知っているように、先年妻
を亡くしてから、子供もいない僕の生活は少し殺風景でね。海があ
って暖かい人たちがいる海浜クリニクは居心地がいいんだよ。・
・朝に魚が水揚げされる小さな市場などは僕の詩興をかき立ててく
れて最高なんだ。・・さて個人的なことはこのくらいにして、こ
れからの進め方を話そうか」

「あら、ちよつと、先生を寂しがらせてしまったようですね。・
ごめんあさい」

「僕はね、日本書紀と古事記の神話時代はわりとくわしいんだが、
雄略天皇以降はちよつと苦手なんだな。私が講師をしている西鎌倉
女子大学の国文科助教授に、まだ若い早川祐司君という人がいるん
だけどね、先生にしては余り固くない人でね、いい加減な私と馬が
あうのだ。今日になって、その彼ならば、私の調査のいい相談相手
になってくれると思いついたのだ」

「それなら、心強いですね」と、沙也香は言った。

古事記の不思議 二

レストランのコーヒーは濃厚で純良だった。良く磨かれたガラス戸の外は広めのテラスになっている。テラスの向こうの生け垣はサザンカで濃い緑色の葉の所々に真紅の花がいくつも花を咲かせている。その向こうに、海が見えている。

田沼はコーヒーに砂糖を入れてから、静かにかき回して生クリーム入れた。生クリームはコーヒーカップの中で、小さな渦となった。それを田村はしばらくじっと見つめた後、沙也香に眼を移して言った。

「古事記が作成されたことは、日本書紀にもその後の史書である続日本紀よくほんぎにも書かれていないのだ。ところが、日本書紀が作成されたことは続日本紀にすっかり書かれているんだよ。古事記が作成された事情は、なんと、君がさっき読んだ、古事記の序文によってのみ知ることができるに過ぎないんだ。もしだよ、この古事記の序文を、古事記からはずしてしまうと、古事記は成立不明の謎の書になってしまうんだ。歴史の教科書には、古事記が成立した年代がしっかりと知り顔にかかっているが、その知識の出所は、みなこの序文であって、他の書物ではないのだ」

「そういうことなんですか？」

「そう」

「なんか不思議ですね」

「古事記の後の史書である同じ官撰の日本書紀に無視されている古事記はどういう書であるかと不思議だ」

「それでいて、古事記序には、くどい位の古事記成立のいわれが書かれているというのは、なんていいいますか調和が取れていない感じですよね」

「そう、山辺さんの言つとおりさ。この変な序によって、古事記は偽書であるという説まであるくらいなんだ。その説を裏打ちするか

のように、江戸時代に入るまで古事記の存在は忘れさられていたと
いうのだ」

「意外ですね」

「そうだろう」

「そして古事記が献上されたのが712年で、日本書紀が献上され
たのが720年で、ほぼ同時に二種の歴史書が完成しているのも不
可解なんだな」

「そうですね」

田沼はポケットから手帳を取り出して言った。「ここに日本書紀
が献上された事を続日本紀から書き写してある。ちよつとそれを読
んでみよう。それはこうだよ。．．．先にこれ、いっぽんとねりしんのう一品舎人親王、天
皇の命を受けて日本紀の編纂にあたっていたが、このたび完成し、
紀三十巻と系図一卷を選上した。．．．これは続日本紀の養老四年
の条、つまり720年の記事なんだ。ここで言う日本紀というのは
日本書紀の本来の書名なんだ」

二人の会話が途絶えた。

古事記の巻頭文を詩人が訳す

翌日の午後図らずもうわさをしていた早川祐司君がひよっこり、田沼の病室にやって来た。

「田沼さん、またずる休みですか」

ソファで古事記と日本書紀の同じ神話のところを照らし合わせていた田沼は、その声に眼を上げると、笑顔の早川の顔が眼に入った。「オイオイ、死にそんな病人をとっつかまえて、その言い方はないんでないの？」と、田沼は怒った顔を試みせる。もちろん、それは冗談である。

「やたらに休講にすると、そのうち学校も首になるかな」

「いやいや、田沼さんは講師でも、言うなれば、学校のスターですからね、これが私なら首が危ないですけど、田沼さんはべつですよ」

「少しは、悪いなとは思っているんだけど、調子が悪いことは悪いんだ。ま、さ来週には、病院を抜け出して学校に行くことはできると思うよ」

「田沼さん無理はしなくていいですよ」

「君に親切にされると、なんか気持がわるいな。優しくして、僕の講義を取るうというコンタンだろう」

「あはは、そうです！」

「そうだろうと思った。あはは。．．．いやあ、実は君に連絡を入れようと思っていたんだよ。また、リゾート海浜病院シリーズの新作を書かされることになっちまった。今度は少し手強いテーマでね、古事記・日本書紀の謎を解くということなんだ。ああ、そう言えば、古事記・日本書紀は早川君が専門だったなと思いついたんだよ」

「まあ、国文科ですからね、知らないといったら嘘になりますけど、ご期待にそえますかどうか。まあ、遊びに来るつもりで、伺いますよ」

「それは、ありがたい。頼むよ」

「いまね、古事記と日本書紀のイザナミ・イザナギの国生みのところを照らし合わせていたところなんだが、変な事に気がついたんだ」「ああ、それならば推測がつかますよ。きつとあれですね」

「まあ、ちよつと僕の言うのを聞いててくれ。君には聞き飽きた話かも知れないが僕にはこの発見は新鮮なんだよ」

「そうですね。前から詩人の眼で記紀（古事記・日本書紀）をみるとどんなのかなという興味はありましたから、ここではおとなしく聞いてみましょう」

「うむ、いい子だ。それじゃ、はじめろぞ」

田沼は、応接テーブルにおいてある、古事記岩波文庫・倉野憲司くらのけんじ校注2003年版を手元に引き寄せた。

「まず、太安万侶の序文に続いて、古事記本文の巻頭は始まるね、今から読むのは、もちろん私なりの解釈でかみ砕いた文だ。まず、最初に倉野氏の解釈文を読んで、本の後ろの方に載っている漢字の原文とてらしあわせるのだ。すると、どんな高名な学者であっても、現代文に関しては小説家にも詩人には負ける文章であることがままたある事だから、僕なりの現代語訳が出来上がるワケだ。もちろん意味不明の単語があれば古語辞典・漢和辞典などで調べてみる。そして、僕の現代語訳を文庫本の解釈文の横に、書いてしまうんだ。したがって僕が読んだ本などは古本屋では二束三文で売り物になんない。それで僕はいつも貧乏で、チャーハンばかり自分で作って食べるハメになるのだよ。アハハ。これはね若い頃、フランス語で書かれた詩集などの訳文の下に、僕の訳詩を書いたりしたくせのなごりなんだ。・・・あ、いけない、脇道にそれてしまった。これも君が悪いんだ、君といるとつい軽口がでてしまうからね」

祐司は、笑いをこらえて、田沼を見ている。

「ハイ、続けます。・・・天地が初めて発した時、高天原たかまがはらに成れる神の名は天之御中主神あめのみなかぬしのかみ。次に高御産巢日神たかみむすひのかみ。次に神産巢日神かみむすひのかみ。この三柱みはしらの神は、連れ合いを持たない単独の神で、身を隠されています。この時、国土は幼くて、いまだ水に浮いた油のようであり、ク

ラゲのように漂う時、葦の芽が勢いよく生えるように成れる神は宇
摩志阿斯訶備比古遲神。うましあしかびひこぢのかみ次に天之常立神。あめのとこたちのかみこの二柱の神も、連れ合
いを持たない単独の神でありまして身を隠されていました。上記の
五神は高天原のなかでも特別の神でおられます・・・どうだい？」
「良いですね、続けてください」

詩人、古事記を訳す 一

「次に成れる神の名は、くにのこたちのかみ国之常立神（国土の神）、次にとよくもののかみ豊雲野神。この二柱の神も、連れ合いのない、独神の神で身を隠されてしまった。次に成れる神はうじけいのかみ宇比地兩神、次にいもすぢいのかみ妹須比智邇神、次につのくいのかみ角杵神次にいもいくくひのかみ妹活杵神。次におほいとのちのかみ意富斗能地神、次にいもおおとのへのかみ妹大斗乃辨神。次におもたるとのかみ於母陀流神次にいもあやかしこねのかみ妹阿夜訶志古泥神。次にいざなまのかみ伊邪那岐神、次にいもいざなまのかみ妹伊邪那美神前記の国くにのこたちのかみ之常立神からいざなまのかみ伊邪那美神以前を、あわせて神世七代と言います（上の二柱の独神は、各一代とし、次の男女十神は二神をあわせて一代と数える）

ここに別格なる五柱の天つ神はいざなまのみこと伊邪那岐命、いざなまのみこと伊邪那美命二柱の神にみことのり詔した。『この漂える国を固め修めよ』そして天あめの沼矛ぬぼこ贈つて委任なされた。それゆえ二神は天あまの浮き橋（神が下界に降りるときに天空に浮いて架かる橋）に立って、その沼矛を油のように漂う物にさしおろしてかき混ぜました。こおろ、こおろとかき混ぜて、沼矛をひきあげる時、その矛の先からしたり落ちる塩が重なり積もって島となった。これがおのじま淤能碁呂島である。その島に二神は天下りなされて、りっぱな柱を選んで立て大変広い御殿を建てられました。そうしていざなまのみこと伊邪那岐命は、いざなまのみこと伊邪那美命に問われました。『あなたの身はどのようにできていますか』答えられて『私の身はなりあがりりましたが、いまだなりあがらない所が一カ所あります』それを聞いて、いざなまのみこと伊邪那岐命はおっしゃりました。『我が身は成り上がって成りすぎた所が一カ所あります。だから、この我が身の成りすぎた所をもって、あなたの身のなりきれない所に刺しふさいで、国土を生もうと思う。どうであろうか』・・・やや、これは山辺さんみたいなレディのいるところでは、恥ずかしくて声にできないきわどい話だね。今日は、来ていなくてよかったなあ・・・と、田沼は早川君の顔を見つめてにやりとした。

「さて、先を急ぐよ。．．．伊邪那美命は、それに答えて言った。
『それでよいでしょう』と。伊邪那岐命は、その言葉を受けておっ
しやりました。『それならば私とあなたは、この天の御柱を反対方
向にまわって巡りあったところで交わろうではないか』．．．これ
も、あからさまな話だねえ．．．」

詩人、古事記を訳す 二

「このように約束して、伊邪那岐命が『あなたは右に回り、私は左に回り、出会いましよう』と言ったあと、二人は柱を回り始めた。二人が出会い伊邪那美命が先に『あれまあ良い男だ事!』と言った後、伊邪那岐命が『荒れまあ良い女だ事!』と言った。

そのあと、伊邪那岐命がその妻に『女の人が先に声をかけるのは良くない』と言われた。寝屋で交わって生んだ子は、人の血を吸うヒルのような骨なし子であった。この子は葦あしの草で編んだ葦船あしふねに乗せて流し去らせました。次には淡島あわしま(不詳)を生みました。この子もまた、子としては扱いませんでした。こうした事で二柱の神は、相談して、口々に『今、私達が作った子はよい子ではなかった。天あまつ神にお聞きしましょう』と言われた。それで共に天上に上がって天つ神にご意見を求めた。天つ神は太占ふとまに(鹿の肩骨を桜の木の皮で焼いて吉凶を占う事)を行っておっしゃられた。『女が先に言ったから良くないのだ。また帰り降りて、男が先に言うように改めなさい』と。帰り降りて、二柱はふたたび、天の御柱を回った。伊邪那岐は言った。『あれまあ良い女だ事!』伊邪那美は言った。『あれまあ良い男だこと!』と。こうして二注が寝屋で交わって産んだ子は淡路島であった。次に四国島を産まれたが、この島は胴体一つで顔が四つあった。顔ごとに名前があり、伊予の国は愛媛と言ひ、讃岐の国は飯依比古いひよひこと言ひ、阿波の国は大宣都比賣おほけつひめと言ひ、土佐の国を建依別たけよりわけと言ひ、次に隠岐の三島を生んだ。この島の別名は天忍許呂別あしのりよわけと言ひ、次に筑紫の島を産んだ。この島もまた、身一つで顔が四つあった。筑紫の国(筑前・筑後)は白日別しらひひわけと言ひ、豊国とよくに(豊前・豊後)を豊日別とよひわけと言ひ、肥国ひくに(肥前・肥後)を建日向日たけひむか豊久士比泥別ひとくしひぢいわけと言ひ、熊曾の国は建日別たけひわけと言ひ、次に吉岐島を産んだ。この島のまたの名を天比登都柱あまのたてよりひめと言ひ、次に大倭豊秋津島おおやまととよあきつしま(本

州島）を産まれた。この島のまたの名を天御虚空豊秋津根別と言った。これら八島を先に産んだ島なので大八島国と言った」

ここまで読んできた田沼は言葉を止めて早川に眼を移した。

「この後、群小の島が産まれ、様々な神が産まれ、最後に火の神を産んで伊邪那美の命は亡くなって黄泉よみの国に言ってしまう訳なのだが、今までの訳はどうか？」

「解りやすくして良いですね。さすが詩人、酒ばっかり飲んでいてではないと言ったことがわかりますね」

「君にそう言ってもらえると安心するよ。しかし、その言葉には、ちよつと棘とげがあるね。・・・この、古事記巻頭の文を次に読む日本書紀巻頭の文と比べてみようと思っているんだよ。そうすれば古事記と書紀の違いがいくらか分かると思うのだな」

翌日の夕方、沙也香が田沼に、構想の進み方等を聞いているとき、ドアがノックされた。「どうぞ」と答えると、早川が入ってきた。

早川は、室内に立っている沙也香にちよつと驚いた風であった。沙也香が和服であったからである。今日、品川で沙也香の高校時代のクラスメートが結婚式を挙げたのだ。沙也香は、このところ田沼先生にご無沙汰であったのと、日頃田沼から「君が和服を着たらキレイだろうな」などと言われていたので、それでは先生の所に行こうと思い、夕方時ではあるが、やって来ていた。

田沼は早川に声をかけた。

「おや、いらつしゃい。早川君、ここにおられる女史が、文化浪漫社の編集社員山辺沙也香さんだ。沙也香さん、彼がうわさの西鎌倉女子大学の助教授の早川祐司さんだ」

「うあ、祐司さんなんて田沼先生にいわれると、ゾクゾクとするなあ。・・・あ、初めまして、先生御用達のきれいな出版社員がいると、先生から聞いていました。あなたですか、光栄です。よろしくお願ひいたします」

「先生はお世辞が上手なんですよ。がっかりなさったでしょう」

「いえいえ」祐司は顔を横に振ってにっこり微笑んでみせた。沙也香も微笑んだ。

「文化浪漫社の出版部におられるなら、歴史専門出版社ですから歴史にお詳しいんでしょうね」

「紺屋の白袴とよく言いますね、私もそのたぐいなんです。歴史は好きなんですけど歴史書をそんなに深く読み込んではいません」
「そうですね、でも、歴史に少しでも詳しいなんて、良いですね」
「うむ、若い者どうして盛り上がってるな。おじさんを置いてけぼりにしないで下さいね」

「あ、先生失礼しました。そこにいたんですか」と、祐司が混ぜっ

返した。

「はいはい、解りました。解りました。そろそろ、お勉強を始めましょうね、小生意気な生徒諸君」

「はい」と二人の声が同時であった。

「うむ、返事だけはよろしい。それでは、始めるぞ、質問などは後で頼むね」

田沼はすでにそこに置いてあった応接セットのテーブルの上に置いたPCプリントを取り上げた。

「エート、これも古事記と同じように、私が訳した物だ。ちなみに日本書紀には古事記に太安万侶が書いているような序文などはない。『日本書紀 巻第一 神代上』の題名のあとこう始まる。・・・天地がいまだ別れず陰と陽も未だ別れない古い昔、混沌であることはぐるぐる回る溶き卵のようでしたが、かすかにきざしのようなものがあるようでありました。その中で澄んだ物が分かれたなびいて天となり、重くにこったものは積もって大地となるに及んで、精妙な物質はつながりやすく、重く濁った物質は固まりがったかった。・・・あの、早川生徒君、沙也香さんの方はかり横目で見てないで聞いてくださいね」

早川は顔を赤くして言った。「濡れ衣だ！聞いてますよ、田沼教授」沙也香は、そのやりとりが面白くてクスと笑った。

「それゆえ、天がまず成立して、地はその後できあがった。その結果、神はその中に、お生まれになった。それで以下のような伝承が残された。この世の始めに大地の浮き漂うありさまは、たとえば泳ぎ回る魚が、水の上に浮かぶようである。そのようなときに天と地のあいだに一つの物が姿を現した。形は葦の芽のようである。それがすなわち神へと変化した。国常立尊と言った。（極限に尊い方を尊みことといい、それに続く方を命みことと呼ぶ。以下はそのように記す）次に生まれたのは国狭槌尊くわさつちのみこと、次に豊斟淳尊とよかむめのみこと。以上三神が最初に天地を治められました。いまだ女性というものはなく、単独な性として男性でありました。

（始原の時については、多くの書が、様々に書いている。以下はその列記である）

一書が言うには天地が初めて別れるとき一つの物が無の中におりました。その形は表現しがたい物でした。そうした有様から神がお生まれになったのです。国常立尊くわさつちのみことと名付けられた。または国底立尊くわさつちのみこととも言いました。次に生まれたのが国狭槌命くわさつちのみことまたは国狭立命くわさつちのみことと言った。次に豊国主命とよくにのみことまたは豊組野命とよぐみのみことと言った。または豊齧野命とよかむのみことまたは葉木国野命はきくにのみことまたは見野命みのみことと言った。

また他の一書が言うには、大昔国が幼く、大地が未熟だった時に例えれば浮かべた油のように漂っていた。その時に国の中に物が発生した。形は葦の新芽の育つに似ていた。これによって生まれた神があった。可美葦牙彦舅尊かみあしかびひこのみことと言われた。次に国常立尊くわさつちのみこと。次に国狭槌尊くわさつちのみこと。

また他の一書が言うことには天地が、いまだ混成している時に初めて神があらわれた。可美葦牙彦舅尊かみあしかびひこのみこと。次に国底立命くわさつちのみこと。

また他の一書が言うには、大地が初めて別れるとき、それとも

に発生した神があつた。くこのとこ「たちのみこと」国常立尊と言つた。次に国狭槌尊。くこのなつちのみことまた高天原におられる神の名を天御中主尊あめのみなかぬしのみことと言つ。次に高皇産霊尊。たかみむすひのみこと次に神皇産霊尊かみむすひのみこと」

ここまで来て、田沼はプリントから顔をあげた。「どうだ、だいぶ飽きてきたのではないかね。この一書に言つは、まだまだ続くけど我慢して聞いて欲しい。これが、古事記と日本書紀のきわだった違いだからね。書紀は原典の書名は伏せているが、諸家に伝わる書の内容を、一つ一つ記載しているのが解るね」

「また他の一書が言うには、天地が未だ固まらないときは、あたかも海の上に浮かぶ根のない雲のような有様であった。その中に何ものが産まれた。葦の芽が始めて泥の中から生え出す清らかさを持ったものである。それが人の形になった。国常立命と云う。」

また他の一書が言うには、天地が始めて別れた時には、あるものがあり、葦の芽のようで空の中に生まれた。これから出られた神は天常立尊という。次に出られた方は可美葦牙彦舅尊という。また空の中にあるものがあり、浮かんだ油のようなようで、これから生まれた神を国常立尊という。

次に神が生まれた？土？尊、沙土？尊である。そのつぎに神が生まれた大戸之道尊、大苦辺尊。つぎにも神が生まれた。面足尊、惶根尊である。次に神が生まれた。伊奘諾尊、伊奘冉尊である。

一書が言うには、この二柱の神は青檀城根尊の子である。

また、他の一書が言うには、国常立尊が天鏡尊を生んだ。天鏡尊が天万尊を生んだ。天万尊が沫蕩尊を生んだ。沫蕩尊が伊奘諾尊を生んだ。

正統な伝承によれば（上記一書が言うには、……。前の文）、まとめると八柱の神がおいでになった。陰陽の気が混じり合い、この神々は男女の両性を持っておられた。国常立尊から伊奘諾尊・伊奘冉尊に至るまでを神世七代という」

田沼は、プリントから再び目をあげた。そして二人を見た。そして言った。

「一書云々の前には、いわば日本書紀の公式見解が書かれていて、

そのあとに、異説として多くの書からの文が転載されているというのが解るね。だから、書紀は公式見解を強引に押しつけている訳ではないのだ。こんな記録があるよと、わりとフェアな姿勢なのだね。しかし、引用する書籍の名を「一書」と書いて伏せている姿勢にはフェアでない姿勢が見えるのだ。これには何か理由があるに違いないと思うのだよ。さていよいよ次はお待ちかねイザナギ・イザナミの話だよ。古事記とどう違うかに注意して聞いて欲しいね」

田沼はプリントに目を落として再び読み始めた。

詩人、日本書紀を訳す 四

「伊奘諾尊・伊奘冉尊は天と地に架かる橋に立たれ、話しあわれ」この底の下に、国があるはずである」と言われた。そして玉で飾った矛をさしおろして探ると、そこに青海原が現れた。その矛の先から滴る潮が固まって一つの嶋となったのだ。それを？ 馭慮嶋と名付けた。ここに、二柱の神はその島に降りられて、夫婦の行為をなされ、州と国を生もうとした。？ 馭慮嶋を国の中心の柱として陽神は左に回り、陰神は右に回った。国の柱をめぐって、二神は顔を会わした。

その時、陰神がまず声を出して言った。『ああ嬉しい。なんと良い男に出会ったのだろう』陽神は、これを喜ばずに言った。『私は男である。理では、最初に声をかけるべきであるのに、どうしてかえって婦人が声をかけるのであるか。よろしくないことになった。改めて柱の周りを回るべきである』と。

そうして、二神はさらに再び柱の周りを回り、巡り会った。今度は、陽神がまず声を出して言った。

『ああ嬉しい。なんと良い乙女に会えたのだろう』そしてさらに言葉を重ねて陰神に聞いた。『今、あなたの身に何かできあがっているところがありますか』答えて言うに『私の身には一つの雌のはじまりという所があります』陽神が言った。『私の身にも、また雄の始めというところがあります。私の身の雄の始めという所を以てあなたの始めのところに合わせようと思つ』

ここに陰陽は始めて、あい合わせて夫婦となった。

子を産むときになって、まず淡路島をもって、身内とされた。二神には、この子は意にそぐわないところがあった。それゆえ、吾恥という意味を持つ、淡路島と呼んだ。そして大日本豊秋津州を生んだ。次に伊予の二名島（四国）を、生んだ。次に筑紫の島を生んだ。

次に隠岐の島と佐渡の島を双子として生んだ。次に越の島（北陸）を生んだ。次に大州（不詳）を生んだ。次に吉備子州（吉備の児島半島）を生んだ。以上の誕生をもって、大八州の名ができた。対馬、壱岐の島、諸所の小島はみな潮の泡が固まって出来たという」

田沼はプリントから目をあげ、言葉を切って、二人を交互に見つめた。そして言った。

「さて、ここまでが日本書紀の国生みの本論で、次に読むのが、諸家に伝わる国生みの伝承なんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5099y/>

太安万侶《おおのやすまる》古事記を作った人の秘密 酔いどれ詩人、別荘病

2011年12月3日21時50分発行